蘭印の大虐殺

南亞細亞民族解放同盟常任理事 竹井十郎著

發行所 東南亞細亞民族解放同盟

停 十錢

特251
527

始

特251
527

はしがき

東南亞細亞の諸民族は、泰國を除くの他、悉く皆、英、米、蘭の諸國によつて征服されて居る。これをその捕はれから解放することが、即ち我が南方政策の根本問題であるのである。

それならその、東南亞細亞の諸民族は、征服者から、どんな惡政暴虐を受けて居るであらうか、どんな搾取誅求を受けて居るであらうか、それを先づ知らねばならぬ。

この小冊子は、それを我が同胞諸君に、あまねく知つて貰ひたいと思つて、書いたものである。吾々は先づその憫むべき彼等の悲慘な境遇を知つて、その人達に滿腔の同情の涙を注がねばならぬ。そしてその涙が澤山集まれば、それがその憫むべき人達を救ふ、大きな力となるのである。

昭和十六年四月

東南亞細亞民族解放同盟

目次

人間の道を外れた暴虐非道……三
良心ある和蘭人學者の聲を聞け……七
人間より物の方が大切にされた……一〇
羅馬のネロにも勝つた暴虐……一四
生地獄に突落されたジャワ人……一八
日本人自ら反省する要があらう……二四
裸でない證據に綿布が賣れる……二九

蘭印の大虐殺

人間の道を外れた暴虐非道

和蘭が東印度を侵略したその手始めは、香料群島であつた。東印度會社の設立は一六〇二年であるが、初代總督ボスが赴任したのは一六一〇年で、アムボンに總督府を置いた。越えて三年、ジャワのマタラム王からジャバラに商館設置の特許を得たが、總督府をバタビアに移し、侵略の基礎を固め、その毒牙を磨き出したのは、總督クーンがジャカルタ城を占領して、バタビアを建設した一六一九年からである。それから東印度會社の暴虐は主としてジャワに振はれた。

世人は今日のジャワ人に、元氣がない、氣力に乏しい、勇氣がないなどといつて居るが、それは本來のジャワ文化史とジャワ人の資質を知らず、東印度會社や和蘭政府

が、いかなる惡虐無道の壓制誅求をして來たかを知らず、唯單に現在のジャワ人を見て、皮相の觀察をするからである。どんな元氣に富み、勇武に長けた民族でも、和蘭人の暴虐非道に三百年も殘害されては、元氣も勇氣も消へ失せずにはゐないであらう。地獄の鬼でも三舍を避くるであらうほどの惡虐無道、殘酷の極みを和蘭人は平氣で行つて來て居るのである。天人共に許さない畜生道を行つて來て居るのが、和蘭人の東印度侵略史なのである。

同じ和蘭人でも、學者の内には流石に人間としての良心を有つた人が尠くない。そんな學者達が、色々の書物に書いて居る、東印度會社や和蘭政府が行つて來た、畜生道に對する非難攻擊の文字を此處に拾つて、その眞相を紹介して見よう。和蘭人のやつたことを、和蘭人がその當時から非難攻擊して居るのであるから、これ位正しい眞實の歷史はあるまい。

一六五〇年、香料群島の監督アーナルド・デ・オーズホーンは、歐洲に於ける香料の高價格を維持せんため、島民の栽培して居つた丁香や肉荳蔻の樹を數萬本伐り倒し

その生產額の減少を計り、更に丁香はアムボン島だけ、肉荳蔻はバンダ島に限り栽培を許すとの規則を設けた。島民が唯一の生活資料として居る香料に、かやうな亂暴を働いたゝめ、島民の食に窮するものが多數に出で、遂に和蘭人に對する反抗戰となつたが、固より新鋭の武器を有する和蘭人には勝てず、數萬の島民は和蘭人のために虐殺されたのであつた。

又香料群島の貿易を獨占せんため、マカサル管下に於けるブギス人の商業を奪ふため、幾萬のブギス人は、日常の生活まで奪はれたので、彼等は遂に海賊に變じ、旅船を襲うて漸くその日の生活を續けたといふ史實も殘つて居る。當時諸方に海賊の横行があつたが、これは和蘭人の暴虐で業を奪はれたものが、止むなく海賊に變じたものであつた。

ライデン大學の教授、コレンブランデル博士は、其著『植民地歷史』に、アムボン、バンダに於ける香料樹濫伐に關し、次ぎのやうに記して居る。

『ピータルス・クーンは、この事件のために、彼れの名に大きな汚點を印して居

る。**その暴虐慘忍は人間の道を外れて居り**、東印度會社ではその召使までが飽食したほどで、會社の幹部までが驚いて居るほどである。クーンが遺して居る記録を見るも、**彼れには人間性といふもののなかつたことが窺はるゝ云々**』

コレンブランデル教授も同じ和蘭人である。而もクーン總督はバタビアの建設者、東印度侵略の基礎を築いた英傑として、和蘭の東印度史には一大榮冠が授けられて居る人物である。その人クーンに對し、**その暴虐は人間の道を外れた惡魔の仕業である**とまで極言して居る所を見れば、いかにその惡虐暴狀が酷かつたか、察するに餘りあるであらう。

次ぎの一節は和蘭人として、又詐らざる告白であらう。キールストラ教授は、其著『强化せる和蘭の權力』の十二頁に

『貿易の獨占權を獲得することは、吾々に甚だ重要であつた。そしてそれが既に吾々の手中に入つた以上、凡ゆる資源を確實に維持する必要があつたのである。であるから**土著民の利害などを考慮する遑は全く吾々にはなかつた**。イスラム教徒も他の異教徒も、吾々基督教徒の眼中には、甚だ價値の尠いものであつた。當時の人の觀念では、聖書の内にある――歪んだり拗ねたりした種族――といふ言葉を好んで應用したものである。それで會社に反抗するものは、**悉く皆亡くなして仕舞へ**といふのであつた云々』

此の教授は全くの御用學者で、東印度會社の走狗であつた人だ。

良心ある和蘭人學者の聲を聞け

東印度會社は始め重商主義であつたが、それが掠奪主義となり、侵略に展開して、遂に本國より六十倍の廣さを有する、現在の東印度即ち蘭印を搾取場となし、本國和蘭では劍を棄てゝ商賣人となり、臺灣より少し小さいほどの和蘭をして、海外投資國の列に入るまでに富ましめたのは、全く東印度の寶庫を掠奪し、インドネシア人の富を奪ひ、それから血と肉とを搾り取つた、その塊りを蓄積したからである。

東印度會社は二百年の久しき、唯東印度の富を掻きさらふことに始終した。それで

その目的のためには、謂ゆる手段を擇ばずで、東印度人を動物同樣に驅使し、寸毫も土著民の利害休戚などを顧慮する處なく、その生活さへも殆んど無視したものであつた。和蘭人の目には土著民は牛馬同樣にしか見えなかつた。而も食ふものさへ碌に與へず、唯勞役せしむることと、農産物や天産物を掠奪同樣の手段で取上げることであつた。

スノーク・フルグロニー教授はいつて居る。

『世人はいふであらう、過ぎ去つた罪惡を發く必要はないであらう、現在の人がその義務は負はないからと。然し、**二世紀間に亘る惡政府の影響が**、白人のために**土著民の精神上及び肉體上に**、いかなる打擊を與へて居るか、それ等の問題を考察せんことは、**到庭吾々の堪へ得る所でないほどである云々**』

と述べて居る。獨逸人ダイトリック・スハケエル教授は、其著『植民史』の八十二頁に、次ぎのやうな記述をして居る。

『彼等の企圖が濠洲群島の周邊に試みられたことは、前記の通りであるが、當時

同地方には何等の物産もなかつたから、**彼等の海賊的掠奪行爲は**、勢ひ既に知れ渡つて居つた他の群島に向つて行はれたのであつた。而してその掠奪行爲は、植民地の經驗に於て知られて居る內で、**最も惡虐を極めたものである云々**』

と記して居り、又、前に引用した同じスノーク・フルグロニー教授は、其著『コライン・オーフル・インヂー』の三十三頁に、東印度會社がいかに土著民の怨みを估つたかを、次ぎのやうに記して居る。

『和蘭東印度に於ける悲劇の始まりは、それは「コムパニー」即ち會社といふ名前である。そしてその始まりは十七世紀の初まりである。併し彼等がその目的の追求に努力した有樣は、いかに昔の風習を忘れんとしても、それは**到底吾々の恐怖と憎惡を强制せずには**、置かないほどの**暴虐冷酷を極めた**ものである。その實際の初まりは、東印度の住民が、**和蘭人は最も下層な滓物である**といふやうに、最低の評價をしたことである。彼等は唯祖國に於ける株主の利益を計る事に熱中したのであつた。しかしまた、會社の下級社員でも、その收入は、雇主たる會社

の重役にも劣らないほどの多額を横領したものである。彼等が欲望に熱中して働いた**その罪惡の激しさは**、遂に東洋人をして、**吾々白人を非難せしむるほどの、怨恨を買つた**のである』

と記して居る。

人間より物の方が大切にされた

『コムパニー』といふ言葉は、東印度會社の代名詞として、今日でも使はれて居るほどに、インドネシア人には、東印度會社は怨み骨髄に徹して居る名前である。東印度會社の暴虐がいかに亂暴であつたかは、良心を有つたものは、その會社に雇傭されてゐた人達でさへ、呆れ返つたほどである。東印度會社は、通商交易の獨占權を握らんためその始めはスペイン人、ポルトガル人、それから英國人と激しい競爭をした。競爭といつても唯商賣上の競爭ではない。競爭は戰爭であつた。兩虎相擊ち、虎狼相食むの修羅場は、歐洲人同士の間に約百年間も續けられたが、香料群島からジャワ方面に於ける鬪ひでは、和蘭人は遂にスペイン人もポルトガル人も追拂ふた。英國人は印度に毒爪を向けて東印度から退却したから、和蘭の東印度會社は、思ふ通りの獨占權を掌握することが出來たのであつた。獨占權を握つたゝめに、**東印度會社の惡虐はいやが上にも暴威と亂暴を極めたのであつた。**

土著民から農産物を搔拂ふ方法は各部落の村長に全責任を負はしたものであつた。例へば甲の村から藍を幾何ピクル獲やうとすれば、村長にその全數量を納付すべき責任を負はせた。それで村長は村民に强制してそれを納付せしめねばならぬから、村長も勢ひ村民に對し强壓を加へる他なかつた。だから村民は遂に村長までを怨むに到り村長で村民のために殘殺されたものが非常な數に達した。コレンブランデン教授の『植民地歴史』の第二卷二百五十二頁に、同教授はこのことに關して、次ぎのやうに記して居る。

『會社は村長を驅役し、村長に重い負擔を負はした。その結果**村長は村民から排擊された**。而も會社の貪婪はヨリ以上な慘酷を與へた。要するに暴**政强壓に始終**

したのであつた云々』

といつて居る。英人クライブ・デーは、其著『ジャワに於ける和蘭人』の中に

『予の觀る所によると、和蘭東印度植民地の狀態は、歐洲人標準ではなく、それは非常に低級な原始的政治組織である。その證據は、土著民の**産物が恰かも一個の政府**のやうに予には觀察された』

といつて居る。この意は、**人より物の方が、大切に**取扱はれて居るといふ意味である。即ち土著民に對する政府ではなく、**産物に對する政府**のやうに觀察されたといつて居るのである。

東印度會社は、同じ和蘭人から、**人間の道を外れた**暴虐だ。**畜生の仕業だ**とまで非難され罵られるほどの罪惡を、二百年の永きに亘つて行つて來たが、會社が人非人の振舞を行つて來たゞけに、その社員も亦人非人であつた。イヤ人非人でなければ、とてもまともには行はれない暴虐であつたのである。いかに會社の方針でも、社員に人間らしい涙を有つた人が澤山居つたならば、いかに白人が東洋人を野蠻人視した當時

であつても、これほど**殘酷眼も當られないやうな仕打は**、なし得なかつたであらう。

歐洲人は東洋人を、野蠻未開の民だといつて、動物扱ひにして來たが、十三世紀の末、十字軍の戰爭が終りを告げた頃までの歐洲人は、ほんとうにまだ野蠻時代であつた。東洋との交通が開け東洋の事情がいくらか彼等西洋人に知られるやうになつたのは、十字軍の宗教戰爭が、直接間接大に關係して居り、それから歐洲は暗黑時代から黎明時代に入つて來たのであつて、歐洲文明の中には、アラビア文化その他、東洋文明が澤山取入れられて居るやうに、文化の眞源は東洋であつて西洋ではないのである

西洋人が東洋に、黃金と香料を求めて遠征して來た頃は、西洋人は野蠻人時代から文明時代に入つて、まだ餘り間のない時であつたから、獨り和蘭人だけでなく、英國人もスペイン人も、佛蘭人もポルトガル人も、**到る處で獸のやうな野蠻な振舞を**、平氣でやつてのけたのであらう。西洋人が東洋人を、野蠻人などといふ資格は、昔からないが、今日でも勿論ない。**野蠻な振舞を平氣で行つて來たことが**、野蠻人であることを、自ら證據立てゝ居るではないか。

筆は少し脱線しかけたが、東印度會社は、唯餘りに利益一點張りに走り、會社の内部さへ顧みることをしなかつた爲に、約半世紀は巨利を收めたが、その後は却つて利益が薄くなり、獨り社員が腹を肥し、會社の成績は段々惡化し、解散前の一七九一年には、損失高が實に九千六百萬フロリンの巨額に達してゐたのであつた。それで一七九八年、新たに生れたバターフ共和國が、東印度會社を一七九九年十二月三十一日に解散し、一八〇〇年一月一日から東印度は和蘭政府の直轄植民地となつたのである。

羅馬のネロにも勝つた暴虐

前東印度國民黨の首領であつた建築技師スカルノ君（今はスマトラのベンクレンに隔離的流罪されて居る）が、一九二九年、蘭印政廳の暴虐によつて逮捕され、裁判に附せられたとき、公判廷で東印度會社の暴虐と蘭印政府の惡政を、一々例證を擧げて徹底的に糺彈し、裁判官をして流石に一言なからしめたことがある。彼れは東印度會社と千八百年時代の蘭印政府を、舊帝國主義的資本主義の惡政と叫び、今世紀に入つてからの蘭印政府を、近代的資本主義的政府といつて居る。スカルノ君はいつた。

東印度會社は千八百年で終焉を告げたが、獨占制度は依然存續され、强壓制度も依然として存續された。千八百三十年までの間は、英國の統治時代や、佛國の革命による思想の混亂時代、舊イデオロギーと、新イデオロギーとの錯綜時代もあつたが、それが過ぎると、ヨリ**一層强惡な制度が現はれ**、一層激しく、吾々ジャワ人の息きの根までを留めんとするのであつた。それは即ち**强制栽培制度**である。この制度は、民衆の背と肩とに、大きな石を墜落さしたやうなものであつた。

强制栽培制度が、いかに**惡虐非道な制度**であり、いかに吾々ジャワ人を殘害したかといふことは、歴史によつても明かに敎へられて居るほどであるが、而もこの制度の弊害は今日猶ほ遺つて居り、その**惡影響は今尙ほ繼續**されて居ると、スカルノ君はいつて居る。

强制栽培制度が、制度そのもの以上に、いかに辛辣な暴威を揮つたかは、當時ジャワで副理事官の職に居つた、デッケルといふ和蘭人が『マックス・ハフエラール』と

いふ曝露小説を變名で書き、強制栽培制度の惡虐暴政を、完膚なきまでに曝露した爲に、流石に和蘭本國の輿論が沸騰し、遂に歐洲各國までを驚かしたに見るも、ジャワ人が虐げられたその慘狀は、想像するだに身の毛のよだつ思ひがするのである。

フェッス教授は、強制栽培制度の暴虐は、羅馬の暴君ネロも三舍を避くるものであるといつて、次ぎのやうに記して居る。

『殘忍冷酷といつても、それは**普通に統治者が行ふ殘忍冷酷な程度でなく、その貪婪恣慾の猛烈さは**、更に〳〵大なる罪惡を重ねて居る。**彼のネロの暴虐でさへ**それは僅かに彼れに接近した僅少の人だけに止まつて居り、社會の平和を破壞するほどの事はしてゐないが、**一國の政治が暴虐であると**、それは社會全般の一大不幸を來すものである云々』

とまで極言して居るのである。更に同教授はいつて居る。

『假りに強制栽培制度が、ジャワ及び和蘭に利益を齎らしたものであると觀て、ジャワ人には勞働といふ習慣をつけ　和蘭の方では、國庫を富ましめた所があつたとしても、吾人が仔細に觀察する所によると、**それは僞善の面を被つた罪惡を**行つたものである云々』

と、飽くまでその制度の罪惡であつたことを非難して居る。强制栽培制度にも、史家によつて、是非の論が多少は闘はされては居るが、それは制度が良かつたといふ論ではなく、世の非難攻擊に對する辯解の程度のものである。當時の和蘭本國の窮乏は財政的に國家が將さに破綻せんとする狀態であつたから、その急を救はんために案出されたもので、考案者のボッシュ總督は、國を救はんとする至誠の餘り、ジャワ人の利害休戚を顧みなかつたものであらうが、牛馬でもあまりに酷使すると、反噬するか、斃れるかするものである。況して相手は人間である。いかに和蘭人がジャワ人を未開野蠻の民と見ても、人間には違ひないから、多少の人間味はあつてよかつた筈だ。それが**牛馬を酷使する以上の虐待であつたから**、和蘭の危急を救ひ、國家の財的破綻は免れしめたといひながら、囂々たる社會の非難攻擊を受けたのであつた。制度の內容概說は、曩きに書いた『和蘭の東印度料理の献立』中に記して置いたから、此處には

省いて置くが、和蘭人の罪惡中、この制度が遺して居る罪惡ほど、深く且つ大なるものはない。

生地獄に突落されたジャワ人

ダン・ストックビス教授は、其著『征服より自治まで』に、飢ゑに疲れた人民が道路に列をなして倒れてゐたのを實見したといひ、それは全く骨と皮ばかりの人間で、骸骨そのものゝやうな民衆であつたと記して居る。左に同教授の記事を少しく引用して見よう。

『千八百六十年頃まで、その悪影響は殘つてゐた。珈琲を植付くるものが支給された勞働賃金は、一日僅か四仙か五仙であつた。而も彼等の生活費は三十仙を必要とするのであつた。藍畑に働くものは、屢ば一ヶ年に僅か八ギルダーが支拂はれたのであつたが、而も亦、珈琲園に働いたものは、一ヶ年、驚く勿れ、四ギルダー五十仙が支拂はれた。五人家族として、一ヶ年一人、九十仙といふ割合であつた。

予の實見した所でも、**飢ゑに疲れた人民が**道路に列をなして倒れてゐたのを實見した。それは全く**骨と皮ばかりの人間で、骸骨そのものゝやうな民衆**であつた。彼等には一粒の米を與ふるものもなく、**唯死を待つて死んで行く**のみであつた。それで多數の人民がその居村を棄てゝ、他に移動して行くものも尠くなかつた。勿論こんな狀態を救濟する道は大にあつたのであつたが、固よりそんなことに目を吳れるやうな官吏は一人もなかつた。

笞刑の如きは毎日のことであつた。それで藍畑に働くものゝ如きは、笞刑を行ふために造られて居る、笞刑柱を見ても最早驚かないほどにまでなつて居つた。

此處には法律的ではないが、現實的な民族がある。その民族はその首領（註村長の意）に恐怖心を懷いて居るが、その首領達は又、統治されて居る暴君に依つて、大なる恐怖心を既に經驗して居るからである。**ジャワ民族の性質は、頗る大膽で且つ自由の精神に富んでゐた**ものであつた。然るに東印度會社の暴威によつ

て、**それは消失せしめられた。**然るにファン・デン・ボッシユの惡虐（註――强制栽培制度を實施した總督の名）によつて更に**それが喪失させられて仕舞つた。**その暴戾惡虐のさまは、東印度會社が行つた行爲は、商取引の仲介業者としての行爲が狂暴であつて、統治上の責任はなかつたが、ファン・デン・ボッシユは祖國を代表して居り、政府を代表して居るのであるから、その責任は、一層重大であるといはねばならぬ。

資源を獲得せんために、植民地の統治法は一國のそれよりも、面目を失ふ憎惡的なものが、施行されるものである。而も前任者よりも後任者の方が、一層それを强化して居る。その統治者達は、熱帶農業の社會に、西洋の生活方法を以て臨み、權威で暴壓を加へ、異民族を虐待酷使したものである』

ストックビス教授の以上の記事は、特に實見記であるだけに、その**慘狀は鬼氣人に迫るの狀があるのである。**

ゴングリップ教授は、其著『蘭領東印度の經濟史』に、次ぎのやうな具體的事實を

記して居る。

『**人民から搾取する**ことについては、其處には何の境界もない。唯人民の軀がその負擔に堪へ得るか、どうかといふ點だけであつた。

强制々度は**唯に服從を强制したのみ**でなく、その强制は、予が玆に述べて居る二十個年に亘る間に於て、東印度會社が强行した割當制度によつて、村長が負擔した重荷よりも、更に甚だ重いものであつた。歐洲人官吏が、制度に忠實であつたことは（註――政府が官吏に歩合制度を布いたことを指したものである）この强制々度をして、層一層の重壓を加へしめたことになつて居る。蓋しそれは利益を更に〳〵に、大ならしめんと努めたからである。

洋藍の如きは、全く栽培するものがない地方もあつた。千八百年に於けるプリヤンガル洲の如きは、**無謀な官吏の措置のために無收獲となつたが、**それは**土著民の不幸**にされて仕舞つた。同州のシムプル郡の如きは、各村の男子は、その住ひより遠い所にある藍畑に、**勞働を强制される事七ケ月に及んだ。**而も自分の食

物は自分で求めねばならなかつた。さして七ヶ月後に自分の家に歸つて見ると、**植ゑてあつた稻は皆枯死して居つた。**

千八百三十一年の始め、同郡の男子五千人と三千頭の水牛が、**五ヶ月間强制的に徵收され**、新たに築造されることになつてゐた工場の敷地と及び、藍畑の耕耘に勞役させられた。藍畑の耕耘はすんだが、藍の種子が到著しないために、畑はそのまゝに放置してあつた。種子がバタビアから屆いたのは、それから二ヶ月過ぎての事であつた。そのため折角耕されて居つた藍畑には、アランといふ茅が生繁つて、地面を蔽ひ塞ひでゐた。それで今度は男子はいふに及ばず、婦人子供までが悉く驅り出され、その茅を刈取らされ、土地を再び耕鋤させられたのであつた。**姙娠してゐた婦人の如きは、畑で勞働しながら分娩する**といふ、悲慘目も當られぬほどの强制勞働であつた』

と、强制勞働の具體的慘狀を記して居る。又キールストラ教授は、其著『和蘭勢力の建設』の三十八頁に

『和蘭の國民は本當に知らないのか、或は知らない振りをして居るのか、何れにせよ、知らん顏をして居るが、東印度では教育費も土木費も、警察費も或はその他の費用の一切は、**零細な土著民の金までを搔集めた、土着民の負擔で賄はれて**居るのである。政府は唯、政府の收入を最大限に獲得しやうとするから、政府の支出を斯の如き手段で土著民の負擔に被せて居るのである。が然し、それよりも猶ほ殘酷な非行は、土著民は、强制勞役のために、**自分等の生活に必要なものを耕作することも出來ない事である。**その結果土著民は、更に一層の困苦に陷り、**饑餓と困憊とに疲れ果てゝ**生氣なく、又村を逃亡するものが相次いで起つて居ることである云々』

いかに和蘭人でも、良心のある學者は、口を極めて、東印度會社の惡虐と、强制栽培制度の暴政非道を痛擊して居るのである。他國のものが、第三者として非難して居るのでなく、和蘭人自身がその國の政府のやつた事を、あらゆる殘忍酷薄な言葉を使つて非難痛擊して居るのであるから、是れ位正しい批判はあるまい。そして又いかに

それが惡虐暴政であつたかを證してあまりあるであらう。

日本人自ら先づ反省する要があらう

世人はよく和蘭人の搾取々々といふが、而もその搾取の實際を、具體的に知つて居るものは極めて尠い。又、蘭印通を以て任じて居る人達の内には、和蘭政府の搾取々々といふが、和蘭人の土民統治は、世人がいふほどの搾取はしてゐない。細かい所にまで注意して、寧ろ親切な統治をして居るなどと、和蘭政府に味方して、和蘭政府のために、辯明これ努めて居るやうな連中もあるが、前者も後者も共に、その搾取の實際的具體狀態を知らぬからの妄言である。

殊に後者の組に入る連中は、和蘭政府筋の人の書いたものを讀んだり見たりし、和蘭人の話を聞き、現地の視察をしたといつても、主として和國人の言を聞いたり、政府筋の報告を見たり、又在留日本人からよい加減の事を聞かせられたり、領事などの話を聞いたゞけの智識であるから、今日の事でさへ、その眞相は御存じない、赤毛布

式の連中である。

一體こんな連中の態度は、インドネシア民族に對して、恰も第三者的統治者かの如き錯覺を懷いて見て居り、虐げられて居る民族であるとの同情心を缺いで居る。我が國の南方政策とは、この虐げられて居る南方の諸民族を、その征服者の手から解放することが、政策の根本問題であるとの、認識すら有つてゐない人達である。和蘭人を怪しからんといつて居つても、それは和蘭人が日本の言ふ通りにならないからとの反感が、最も多くそんな人達の心理狀態を動かして居るのであつて、一種の妬みであり、僻みでもあるのである。それが意識的ではなくとも、和蘭人に日本が取つて代はつたならと、いつたやうな根性が、肚の中に匿されて居るから、自然に感情がそんな風に動くのである。

若し、日本の南方政策といふものは、この憫むべき、虐げられて居る民族を解放してやることであるとの信念が有るなら、尠くも同情を以て東印度人を見るといふ、態度だけは常に備はつて居るはずである。和蘭人と同じやうにインドネシア人を、輕蔑

して見るやうな氣分や、心持ちは起らないはずである。

然るに和蘭人は怪しからん、土民を搾取して自分達は非常な贅澤をして居るなどといふ癖に、土人が土人がといつて平氣で居るのが、殆んど凡ての日本人ではないか。土人といふことは、未開野蠻人だとの意味で使はれて居るのであるが、その土人といふやうな輕蔑した言葉を使ふその心持ちは、和蘭人と少しも異なつた處はないではないか。こんな氣分を有つて居るものは、侵略思想の擒になつて居り、一種の征服觀念に捉はれて居る連中である。

日本に領土的野心はないといふ言葉は、我が外務大臣がお定りに使ふ言葉で、問はれもせぬのに、答をするのが、我が國の大臣の口癖であるが、世界中、こんな言葉をまともに聞いて居る外國人が、唯一人でもあるであらうか。是れ位莫迦げた言葉はない。言譯するから却つて疑はれるのだ。心に疚しいことがないなら、俯仰天地に恥ないなら、常に正々堂々たる態度を持して居ればよいのだ。然るに侵略とか征服とかいふ言葉は使はないが、思想的感情的には、侵略思想の擒となり、征服觀念に捉はれて居る人が多いから、南洋の土人がなどと平氣でいつて、自ら恥ぢず、自ら矛盾を感じないのだ。それだから、大臣が何百遍、領土的野心はないといふ手形を入れても、外國人には蚊の聲ほどにも聞えず、却つて益々疑はれるのである。

亞細亞の諸民族は、なるほど我々よりも文化は劣つて居るが、その文化の程度如何に拘らず亞細亞の諸民族と、精神的に手を握り、文化的に連衡すること以外に、日本の亞細亞政策といふものがあるであらうか。吾々はゴビの砂漠相手に、政策を行はふといふのではないはずだ。大陸政策といひ、南方政策といひ、凡ては是れ、亞細亞の諸民族を相手に、對象に政策を行ふことである。それに何ぞや、その相手を輕蔑して何をしやうといふのだ。天下これくらい、譯の判らないことはあるまい。

日本は亞細亞の盟主だと、我が國自らいつて居り、近頃は亞細亞の指導權を有つのだといつて居るが、一體それは誰を相手にするのか。國には國民が居る。國といふことは、その國に民が居るといふことではあるまいか。その國が日本より弱く、民も日本人より文化の程度が低いからこそ、日本が盟主となり、指導權を有つといふことに、

なるのではあるまいか。國力も強大で、民の文化も高いなら、日本が盟主となり、指導權を有つ必要も餘地もないであらう。

日本が亞細亞の盟主となり、亞細亞の指導權を有たねばならぬならば、吾々日本人は先づ自ら反省して見る必要があるであらう。一體吾々は過去に於て將た現在に於て、亞細亞の友達——吾々が眞の友達とせねばならぬ亞細亞の諸民族に對し、何をなし又何をなさんとして居るであらうか。盟主といひ、指導權といふことは、强制する性質のものではない。相手から感謝され、信頼されてこそ、初めてそれが成立つものであるのであるが、日本は彼等から感謝され、信頼されることを、果してして居るであらうか、どうか、吾々は先づそれを考へて見る必要があるであらう。

共榮圈といふことは、共存共榮の原則に立つて、御互に幸福と繁榮を增進して行かうといふことである。それなら誰とその幸福と繁榮を、共にしやうといふのであらうか。まさか英米人と共にしやうといふことではあるまい。日本が亞細亞に國を成して居る以上、吾々の友人——共に幸福と繁榮を樂まうとする相手は、いふまでもなく亞細亞の諸民族であらう。

それなら、その諸民族が日本に感謝し、日本人を信頼するやうに仕向けて行かねばなるまい。憫むべき境遇にあり、弱い民族である彼等に對しては、先づ同情心を有つことが第一であり、そして彼等をして、その憫むべき境遇から救ひ出し、强い民族に導いてやらねばなるまい。さうしてこそ、初めて吾々日本人と心からの友人となり、共に〳〵幸福と繁榮を樂しむことが出來るであらう。

裸でない證據に綿布が賣れる

南洋のはだかん坊が、南洋の黑ん坊などと、南洋に永らく住んでゐた人までが、平氣でいつて居るが、一體南洋人ははだかでゐるであらうか。熱帶の暑い國の人が、裸體でゐるのは、寧ろそれが自然があらう。吾々日本人でも夏になると家の內では、素裸になるではないか。處がその南洋の人達は、實は裸ではないのである。裸でない證據には、我が國の綿布が每年何千萬圓、何億圓といふほど澤山、南洋に輸出されて

居るに見れば、一目瞭然たるものがあるであらう。日本綿布の御得意さんは、世人がはだかん坊といつて居る、その南洋の人達であるのである。實際裸の人間なら綿布などは賣れないであらう。綿布は著物になるのであるから。

南洋展覽會などでよく見る圖であるが、入口などには屹度はだかん坊の南洋人形などが飾つてある癖に、中の方では、南洋への綿布輸出高は、近年歳と共に增加しつゝありと、どえらい統計數字などが列べてあることである。こんな矛盾なことにさへ、その矛盾に氣のつかない日本人ではないか。馬鹿氣て物がいへぬとはこんなことであらう。なぜ立派に著物を着て居る實際の南洋人の人形を飾つて、こんな風に著物を著るから、我が國の綿布が澤山賣れるのであると宣傳しないのであらうか。いかに宣傳下手の日本人でも、これはあんまり物が分らな過ぎるではあるまいか。それが立派な御役人さんであつたり、一廉の南洋通であつたり、南洋を相手に商賣して居る人達であるのである。笑はせるは通り過ぎて、あきれて物がいへないとは、こんな事をいふのであらう。

近頃は大新聞社から特派員とか駐在員とかゞ、南洋にも澤山行つて居るが、彼等の通信といふものの殆んど凡ては、やつぱりはだかん坊、黑ん坊式の通信ではないか。どこの國にも表通りもあれば裏通りもあり、立派な商店街や住宅區域のある一方、貧民街や長屋式の裏町もある。從つて同じ民衆でも、その町によつて住んで居る人、通行して居る人が違ふものだ。裏通りを知る必要もあるが、先づ表通りを知つてからのことである。明るい方面を知つてから、暗い方面を探して見るもよからう。

然るに我が國の新聞記者といふ連中は、わざ〳〵暗い方面、裏町方面のことを通信して、一向明るい方面、表通りのことは通信しない。興味本位ならそれでもよからうが、國家奉仕などと大きな口を利きながら、こんな有害無益な通信をすることを任務だと心得て居る。又本社に頑張つて指揮して居る幹部連中も、その過りを正してやらうとしない。イヤ幹部連中の頭も、海外に居る記者の頭と同じ程度の人間だからであらう。

彼等には南洋問題の本質が分つて居らず、日本は南洋に何を求め、何をしなければ

ならぬかゞ分つて居らぬ。彼等は南洋問題とは、和蘭人に頭を下げて、鼻くそほどの物産を分けて貰ふことだ位に思つて居る。それでなければ日本が軍事行動を起して、蘭印を占領し、和蘭人に代つて日本人が蘭印を統治することだ位に思つて居る。だからインドネシア人を、どこまでも被統治民族と見て、明るい南洋や表通りの事は紹介せず、暗い汚い方面だけを書き、彼等はまだ未開民族だと、我が國民に知らしむるやうな記事ばかりを通信するのだ。こんな新聞記者は國家を毒するものだといはれても仕方ない連中だ。インドネシア民族の大部分は、なるほどまだ蒙昧の域を脱してゐない民族であるが、それでも極めて柔順に農業にいそしんで居る、立派な農業國民である。ジャワだけでも彼等農民の手で作り出される農産物は、一ヶ年二十何億ギルダーの巨額に達して居るのである。蒙昧とはいへ、それは未開野蠻の民でもなく、況んや原始的な民族でもないのである。近く三十數年來のインドネシア人の知識階級は、立派に東印度人としての智的才能を發揮して居る。一番後れて居つた經濟方面にも、近頃は非常な發展力を示して居るのである。

415
207

昭和十六年五月　五　日　印刷納本
昭和十六年五月　八　日　發　行

（定價　金十錢）

著　者　竹井十郎
東京市赤坂區氷川町一四

發行人　竹井十郎
東京市神田區錦町二ノ五

印刷人　前田宗松
東京市神田區錦町二ノ五

印刷所　株式會社文成社
東市市赤坂區氷川町十四番地

發行所　東南亞細亞民族解放同盟
電話赤坂四八〇六
振替東京七二三二

版權所有

終